

## 2020 年度実施概要

学校名

気仙沼市立小泉小学校

採択活動名

ヒメシロチョウを守ろう

実施単元

単元名	学年	教科
1. ヒメシロチョウを守ろう	3, 4年	総合
2. 川と海のつながりを考えよう	4年	総合

取り組みの概要

絶滅危惧種となっているヒメシロチョウの食草であるツルフジバカマの栽培を行った。

今年度はツルフジバカマを植えることだけでなく、ヒメシロチョウの生態や特徴を地域の人に発信する活動を行った。ヒメシロチョウを絶滅から救うためには、食草を増やすことや生息している環境を維持することなど、植栽活動と自然環境の保全が必須であることや、身近な人に発信することが大切であることに気づき、児童が主体的に活動内容を考えることができた。また、学区内を流れる津谷川やその支流になる外尾川の水質調査や生き物調べを行い、周囲の自然環境が川の生き物に影響することを学んだ。

児童は、調査や体験を通して多角的に学習したことで、生息地となる小泉地域の環境を整えることがツルフジバカマやヒメシロチョウなどの生物を守ることにつながり、川や川の生き物、海の保全にもつながっていることについての理解を深めることができた。

活動中の写真



【ヒメシロチョウの現地観察】



【幼虫、さなぎの飼育、観察】



【地域への発信（幼稚園）】

## 2020 年度実施概要

学校名

気仙沼市立小泉小学校

採択活動名

全校遠足

実施単元

単元名	学年	教科
1. 全校遠足	全学年	学校行事

取り組みの概要

全校で、陸前高田市の津波伝承館と気仙沼市内にある岡本製氷、藤田製函店、氷の水族館を見学した。

「東日本大震災津波伝承館」では、地震や津波の歴史と津波が起きるメカニズム、減災・防災について過去の例やこれから必要だと思われる取組について、学年の発達段階に応じて学んだ。今後起こりうる大地震や津波に対して自分たちに何ができるか、また、どう行動すればよいかということについて具体的に考えるきっかけをつくることができた。

水産加工業者等へ用途に応じて氷を提供している岡本製氷や、同じく発泡スチロール製の容器を提供している藤田製函店を通して、それぞれが気仙沼市の水産業にどのように関わっているのかを学ぶことができた。

見学を通して、今回訪問した施設は水産業を支える上ではなくてはならない仕事だということを知ることにより、魚を捕ったり、売ったりしている仕事だけが水産業ではないことを知り、子供たちは「海の仕事」について新たな視点をもつことができた。これまで自分たちの生活がどのように海を利用して支えられていたのか、時折見せる海の脅威とこれからどのように向き合っていくのかという「海と共に生きる」視点を学ぶよい機会となった。

活動中の写真



【東日本大震災津波伝承館】



【岡本製氷の製氷作業見学】



【藤田製函店】

## 2020 年度実施概要

学校名

気仙沼市立小泉小学校

採択活動名

サケのひみつ

実施単元

単元名	学年	教科
1. サケのひみつ	2年	生活
2. いのちのつながりを調べよう	6年	総合

取り組みの概要

2年生と6年生が小泉地域にあるサケ孵化場へ行き、サケの生態や孵化のしくみについて学んだ。今年度から6年生もサケ孵化場を見学できるようカリキュラムを見直し、年度をまたいで学習ができるようにした。6年生は2年生の時に放流した稚魚が帰ってくることを心待ちにしている姿が見られ、学習の連続性を感じさせるとともに、目的意識をもって意欲的に取り組むことができた。

2年生はサケの生態と生き物の成長の様子を学び、6年生ではサケの回遊と海や川、山の環境とサケの生育の関係を学んだ。2年生はサケの腹から卵を取り出す体験や受精させる体験をしたことで、命のつながりと命の大切さを学んだ。6年生は見学前にサケの回遊について調べ、回遊する中で海や川、山の環境、温暖化がサケの個体数に関係していることを知り、見学先でもサケが年々減っていることを受けて海洋問題の重さを学ぶことにつながった。また、サケが産卵して命が尽きたあとについて調べることで、絶命したサケは栄養になり、それが川や海へと流れて様々な生き物の命につながることを学ぶことができた。

活動中の写真



【サケの採卵体験】



【飼育中のサケの卵】



【鮭増殖組合の方からの話を聞く児童】

## 2020 年度実施概要

学校名

気仙沼市立小泉小学校

採択活動名

小泉の水産業について調べよう

実施単元

単元名	学年	教科
1. 小泉の水産業について調べよう	5年	総合

取り組みの概要

小泉地域の特産品であるワカメについて養殖の工夫や自然環境との関わり等を学ぶため、養殖業を営む地元業者「蔵内之芽組」で種ばさみ体験と刈り取り体験をした。子供たちは、体験と業者の方からのお話を通して、海水温が低くないとワカメが育たないことや、山からの雪解け水が栄養を運び、ワカメの生育を支えているということを知ることができた。

2月の刈り取りの際には、11月の種ばさみの時よりも大きく育ったワカメの様子を目の当たりにし、小泉の海の豊かさと自分たちの食を支える恵みをもたらしてくれているありがたさを実感することができた。また、今年は寒冬だったことがワカメの生長を大きく助けたことを知り、海水温などの海の環境がワカメの生育と関係していることを結び付けて考えることができた。蔵内之芽組の代表の方の話から、温暖化が進む中でワカメの生育状況も悪化しているという現状を知り、小泉地域のみならず養殖業に携わる漁師の方々の努力、工夫などを知るきっかけとなり、水産業が海の環境と密接に関係していることを、体験を通して学ぶことができた。

活動中の写真



【ワカメの種ばさみ準備をする児童】



【ワカメの刈り取り体験】

## 2020 年度実施概要

学校名

気仙沼市立小泉小学校

採択活動名

海洋環境問題について考えよう

実施単元

単元名	学年	教科
1. 海洋環境問題について考えよう	4～6年	総合

取り組みの概要

東京海洋大学三陸サテライトの協力の下、東京海洋大学の内田圭一准教授によるオンライン授業を行った。校内で行った事前の学習では、海洋プラスチックはなぜ問題視されているのかを知るために、プラスチックが自然に分解されるまでどのくらいかかるか考えさせた。自然分解には約400年の時間がかかることや分解される前に細分化してしまうことを知り、プラスチックごみは環境に様々な影響を及ぼすことを学んだ。

オンライン授業では、世界のプラスチックごみの取組と日本の取組の考え方を比べたり、海洋プラスチックが年間どのくらい川や海に流されているかを学んだりしたことで、子供たちは環境問題が世界規模で広がっていることや、小泉地域も例外ではないことを知ることができた。また、海洋プラスチックは私たちの食生活に紛れているという事実には驚き、プラスチック製品の利用の仕方に目を向けたり、学校行事「海に親しむつどい」の際に例年行っている海浜清掃とつなげて考えたりするなど、自分事としてこの問題を考えることができた。

活動中の写真



【内田准教授によるオンライン授業の様子】



【マイクロプラスチックの観察】